自閉症スペクトラム児の多様性と自主性を尊重した療育プログラムの検討(22)

—小学校高学年・中学生：話し合い場面におけるプログラム作成の工夫—

The care and education program development that support diversity and individual initiatives of children with autism spectrum disorder: Consideration of environmental settings in discussion scenes

○¹松本 龍太郎・¹白井 あかり・¹安陪 梨沙・³松元 佑・²竹内 謙彰・¹荒木 穂積

○MATSUMOTO Ryutaro, SHIRAI Akari, ABE Risa, MATSUMOTO Yu, TAKEUCHI Yoshiaki, ARAKI Hozumi

(¹立命館大学人間科学研究科・²立命館大学産業社会学部・³立命館大学社会学研究科)

(¹Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University / ²College of Social Sciences, Ritsumeikan University / ³Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University)

Key words: 話し合い場面、見通し、療育プログラム

目的

本グループは小学校高学年～中学生のASD児者を対象とした療育プログラムの開発に取り組んでおり、2020年度は、自己主張と他者受容のバランスをねらいとした活動を行った。しかし、1月の活動では話し合い場面プログラムとは関係ない遊びや行動が多く見られた。そこで、本研究では、よりよい療育プログラム開発のために、1月のプログラムに焦点を当て、観察された行動や場면을記述し、質的に分析・検討することを目的とした。

方法

2020年10月～2021年3月の間、本療育プログラムを実施した小学校高学年～中学生のASD児者5名が参加しているグループを対象とした。療育プログラムは月1回、120分の活動であった。1月の話し合い場面プログラム外の行動が顕著に見られた観察情報を記述し、2月、3月での類似した場면을抽出し、比較・検討を行った。メインプログラムの内容を表1に示した。

表1 各月の分析対象となったプログラムと内容

月	プログラム	内容(話し合い場面)
1月	スポーツチャンバラ	ルール説明・①対戦人数決め・②対戦相手決め・③オリジナルルール決め
2月	集団ジェスチャーゲーム	ルール説明・①役割決め・②配役決め
3月	転がしドッジボール	ルール説明・試合前の話し合い(①前・②中・③後)

結果

対象児の活動の行動と場면을ビデオカメラで記録し、映像を基に対象児の会話や様子の分析を行った。各月の活動時における全体での様子を表2に、1月の活動における参加児の様子を表3に示した。

表2 各月の活動における全体の様子

月	ルール決め	話し合い①	話し合い②	話し合い③
1月	全体的に皆話を聞いている。	プログラムに関係のない行動が見られるも、全体的にルール決めに参加して、意見を出していた。	プログラムに参加しつつも、注意が違う方向へ向いたり、立ち歩きが目立つようになった。	C、Dの立ち歩きが目立った。B、Aのみプログラムへ参加し、意見を出している状態だが、Aが提案するも、Bの主張に折れる場面が目立った。
2月	[室内]全体的に皆座って話を聞いている。立ち歩きはCのみ。	[屋外]子どもの気質にもよるが、概ね自分たちで役割(演者・回答者)を決めることができていた。	[屋外]各自自分の演技の配役を自由に選び、演じていた。プログラム以外のことを行っている者がいなかった。	[室内2中]人数が増えた(+3)。試合前の話し合いは活発に行われた。一方Bは「ボールを転がす」ルールが守れなくなっていった(疲労と高揚)
3月	[室内1]座って話を聞いている。席を立つ場面があったが、すぐに席に戻った。	[室内2前]逃げ方の提案はE(中2男)から、ボールの個数はBが、のように役割が自然と決まっていた。	[室内2後]Bから提示していない新しいルールを提案する割合が増えている。Eが提案するも、Bの主張に折れる場面が何回もあった。	

表3 1月の活動における参加児の様子

参加児	ルール説明	話し合い① ルール決め	話し合い② ルール決め後	話し合い③ オリジナルルール決め
A 中2男	座って話を聞き、言葉が発さず、体のどこかを触る。チャンバラを振るまねをしていた。	Bの発言から誘発されるように対戦人数に関して一言だけ述べていた。手を叩いたり、剣を打ち合わせる行動があった。	先生達の名前をボードに書いたり、あみだの場所を選んだりと活動に参加していたが、Cくんが作ったお面の方を見ることがあった。	Cの様子を見に行く。ルールをいくつか提案するものの、Bに反対され、首をかき上げる行動が見られたが、最終的にはAが折れていた。
B 小5男	「頭はなしにしよう」と提案する先生によるデモンストレーションを見ながら「頑張れ」言い、先生が打ち合いをする度に体を跳ねて、興奮している様子が見られた。	対戦人数の案を止めどなく出し続ける。AやCに「どれがいい?」と尋ねていた。自分のタイミングで立ち上がり、前方のホワイトボードに自身の考えを書いた。	あみだくじを提案した。Cに話しかけるが無視され、ふざけるようにチャンバラで叩いていた。立ち歩きやCの遊びに関心を寄せている様子があった。	ひたすら案を出し続ける。Aの案に反対して、多数決を取り始め「過半数」とした。先生達が折衷案を伝えたが、納得しなかった。
C 小6男	お絵かきに夢中であったが、先生の方は見ながら聞いていた。その後は先生にちょっかいを出して、お絵かきに戻る。	BがCに話しかけるが無視して、お絵かきを続ける。似顔絵を切るために鏡を取りに行くなどの行動が見られた。	開始時から描いていた似顔絵をお面にした。対戦相手を書くボードにはイラストを書いていた。Bに叩かれてやり返していた。立ち歩いていた。	ぬいぐるみを吊して遊んだ。廊下に向した窓に座り、からかうような動作をしていた。テレビをいじるなどの行動も見られた。
D 小6男	座って聞いており、前後に揺れたり、袖を触っていた。	対戦人数の提案をした。その修正についての言動が見られていた。時折立ち歩き、ボールを取り出したり、チャンバラで遊んでいた。	立ち歩く行動が多く見られ、途中で席につきも、注意がCの作ったお面にいくことがあった。Cをプログラムに誘う言動があった。	Cが遊んでいたぬいぐるみを外しに行く。Cと一緒に立ち歩く。Bの多数決には参加していた。たまたまホワイトボードを見ている。

考察

話し合い場面における分析結果より、話し合いの目的が不明瞭で時間が長くなると全体のまとまりが崩れることが明らかになった。一般的にASD児は、見通しをもって活動することに困難を抱えているとされているため、プログラム作成時に項目を時間で区切り、終了時間を提示することで見通しをもたせていた。しかし、今回の検討より、時間という枠組みよりも、一つ一つの話し合い場面における目的の明確さが重要であることが示唆された。今回取り上げた3つの活動月のプログラムでは、話し合い活動の促進という全体目標はあったが、個々の場面を見た際、子ども自身がその時々何をも目的に話し合えばいいのかが不明確になっていたと思われる。今後の展望として、プログラムの作成時において子どもにとって目的が明確になる場面や活動を考え、プログラム全体の目標を掲げるほうがよいということが考えられる。

*本研究は立命館大学人間科学研究科の療育プログラム開発プロジェクトの一環であり、立命館大学の研究倫理の指針に基づいて進められている。研究発表にあたってはプロジェクト参加児の保護者の同意を得ている。